



仲間と共に

学校目標 「めあてをもち 仲間と共に やりぬく心」 令和4年9月28日



「転ばぬ先の杖」「転んだ後の杖」

校長 小野木義浩

転ばぬ先の杖



先が見通せない世の中であっても、子供たちが「自分で・自分たちで」考え、行動できる自立した人に成長してほしいと願うのは、子供たちの周りには多くの大人の共通した願いではないでしょうか。自分たちがいなくなっても、子供たちが一人でもしっかりとたくましく生きていく力の基礎を身につけてほしいです。

しかしながら、子供たちは、成長過程にあります。子供たちは、学校を中心とした世界で仲間と一緒に学び、生活する中で、うまくいって自信を身につけたり、失敗して落ち込み、悔しがったり、人との関わりの中でやさしさを学んだり……。失敗や成功を繰り返しながら、問題があったときの解決の方法、自分の思うようにならないときの心の折り合いの付け方、仲間となかよくする方法、けんかしたときに仲直りする方法など、様々なことを毎日学んでいきます。

ここで、考えたいのが、「**転ばぬ先の杖**」です。「転んでケガをする前に、杖を用意して体を支える準備をしておくこと」という成り立ちから、「さまざまなリスクや不測の事態に対し、十分な準備をして備えておくこと」のたとえとして使用されます。子供自身が考えて準備する「**転ばぬ先の杖**」は、生きる上で大切なアイテムで、自立して生きていくために必要な力となります。しかし、杖は杖でも、「**大人の用意する転ばぬ先の杖**」は扱い方が難しいと言われています。これは、しばしば、子供が失敗しないように親が洗回りをしすぎて、子供に注意したり、子供に変わってやってしまったりすることにつながります。これを続けていくと子供は失敗を恐れ、チャレンジする気力が無くなったり、トラブルがあったらすべて大人に間に入ってもらい解決を望んだりすることになる場合が多いです。

大人は「子供を失敗から守る」と思っているにもかかわらず子供がやること、やるべきことを奪ってしまうことがあることに気づく必要があります。なんでもやってあげることが子供のためではありません。時には子供にやらせて失敗をさせることやトラブルを自分の力で解決していこうと仕向けることも大切なことです。失敗させることが目的ではありませんが、失敗から何を学んだかを子供から聞いて「そうか、そんなことに気付いたんだね。次は、どうしたらうまくいくな。」といっしょに考えていくことで、意識を未来に向けていきたいものです。子供というものは、私たち大人が思うよりはるかに早いスピードで、力をつけていきます。周りの大人がハラハラしながら「心配」する時期は、子供が大きく成長している時期だと言えます。だからこそ、子供の育ちを信じて、ゆったりと見守りたいものですね。

こんな話を聞きました。……「**子供誰もが欲しいのは『転んだ後の杖』。『転んでも大丈夫』という周りの大人の安心感**ではないでしょうか。子供は（お父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃん、教職員など）周りの大人の安心感と信頼感をエネルギーにして成長します。……」

子供は成長過程にあり、不完全、どの子も当たり前失敗するし、まちがいを起こす存在であるという共通の認識をもつこと、そして、お子さんはもちろん、周りの子供たちも、「今も、失敗から学んでいる」と私たち大人が見るようにすること、子供を信じてまかせてみる必要があると思います。